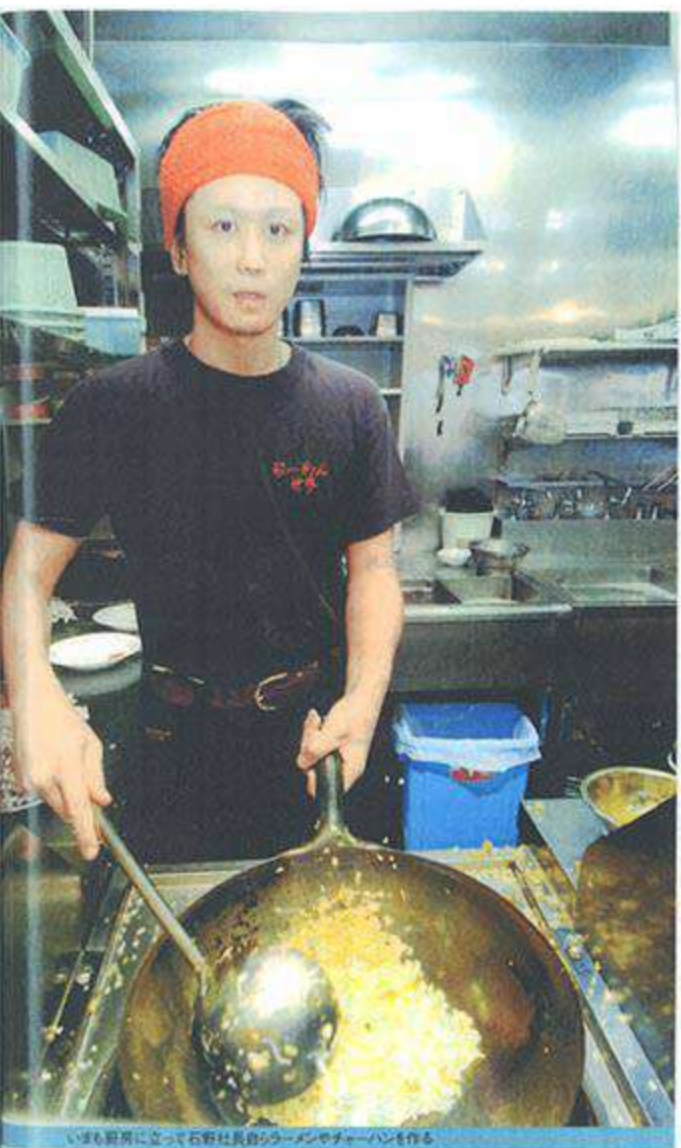


人生、いま一度  
 一貫してラーメン店創業  
 株式会社「理想」代表取締役社長  
 石野康弘さん(37) 三田市

# 所持金1万円で家出 捨てられなかった男の夢

「もっと大きくなりたい」。北陸3県で「らーめん世界」をチェーン展開する石野康弘さん(37)の二貫した夢である。会社を辞めて家出同然でラーメン修行に向かった日も、関古島が鳴く店でも、ひとり味の研究に没頭した日も、いつも心に刻んできた。想像、辛苦を重ねた末に生まれたラーメンとともに、然い男の戦いは続く。



いばも厨房に立って石野社長自らラーメンやチャーシューを作る

## 家出同然で修業に

「人に使われるサラリーマンのまじや大きくなれない」  
 そんな思いを秘め、大学卒業後、就職した薬品会社を3カ月で退職、富山市の実家を飛び出した。荷物にはビニール袋に入れた洋服だけ。所持金は1万円にも満たなかったろう。出奔という言葉がふさわしい家出である。車で向かったのは大学生活を送った大阪にいる師匠のもとだった。

大学時代は学費や生活費をねん出するため学業の傍ら、アルバイトを余儀なくされた。ありていにいえば、家が貧しかったのだ。師匠は1年間、アルバイトで働いたラーメン店のあるじである。

「オレは中卒だが、大卒の人間には負けん」という言葉が口ぐせの師匠は中学卒業後、すぐに修業に入り、やがて大阪でラーメンのチェーン店を展開した懐の深い苦勞人だった。

この人物にはれ込み、「大学を卒業したらラーメン屋になろう」と思った。ラーメンが好きだからラーメン屋なのではない。師匠が

師匠に弟子入りしたのだった。

## 自分には才能がない

故郷を飛び出して4年間、大阪で修業した。独立は考えたことがない。師匠のそばで働くことがこの上なく幸せだった。そんなある日、師匠から1000万円単位の現金を渡され、こう言われた。  
 「地元に戻り、この金で店を開いて勝負しろ。金はもうかつたら返してくれればいい。そして万が一、店が失敗したら、ここに戻ってもう一度、修業をやり直せ」

1997年、金沢市西泉町で安い物件を見つけ、「らーめん世界」1号店をオープンする。不動産会社の担当者が「そこは客がこないからやめた方がいい」と耳打ちしたいわくつきの場所だ。しかし、そんなことは少しも意に介せず、オープンを決めた。

「客がこないなら、オレのラーメンで行列を作ってやる」  
 そんな意気込みだ。とはいえず、師匠と同じラーメンで勝負するつもりはなかった。勝負をしかけるのは、あくまで「石野のラーメン」。試行錯誤の末、独自の味を編み出

して開業に臨むが、当初はせいぜい1日30杯。行列どころか、店内では関古島が鳴いていた。

自分には才能がない。  
 その時、そう痛感した。だが、逃げ出すつもりはなかった。才能がないなら人の2倍、3倍努力すればよい。オープンから3年半、店に寝泊りして自分のラーメンづくりに没頭する。睡眠は毎日4時間足らず。自身に許したぜいたくは一息入れる時に飲む缶コーヒーだけだ。こうした努力が実ったのが、1日5000〜7000杯のラーメンを売る人気店となるのはオープンから2年後のことだった。

## ラーメンの日本一

「石野のラーメン」は2004年、大手コンビニエンスストアとのタイアップでカップめん化されて全国発売。13万食をわずか2週間で売り切った。「らーめん世界」はこれによって一気に知名度を上げ、その後、富山県と福井県に進出する。いま、チェーン店7店舗で月間10万食のラーメンを販売している。今年12月には金沢市で板田店をオープン、来年は富山県高岡市、金沢市田上町、小松市にも出店し、



「らーめん世界」1号店の西条店。「世界」という店名は「だれもが一人一人、自分だけの世界を持っている」という思いから命名された

2008年には北陸3県を足場に全国に打って出るつもりだ。

たった1人で始めた店はいま、アルバイトを含めて200名の大所帯になった。しかし、18歳で家を飛び出す時に抱いていた「大きくなりたい」という願いは、いまだ実現した気がしない。

最近、夢のない会社が多いと感じるが、「らーめん世界」はそんな会社にしてはならない、と肝に銘じている。社員には仕事を通し、大きく成長してほしい。そしてそのためには自分自身もまた、もっともっと大きくならなければならぬ。いまの夢はラーメンで日本一になることである。社長のいすにふんぞり返っている暇はない。



仕事の合間をぬって、12月にオープンする板田店の打ち合わせを議める。店の制服の背中には「一生懸命」の文字が記されている

ラーメン屋だからラーメン屋だったのだ。もしも師匠がトンカツ屋だったなら、トンカツ屋の道を選んでいたに違いない。

しかし、その決意は家族をはじめとする周囲の反対にあり、とん挫する。

「大学で教員免許まで取ったのになんでラーメン屋なのだ」

それが周囲の言い分である。家族の勧めで泣く泣く薬品会社に就職。だが、「大きくなりたい」という夢絶ちがたく、会社を辞めて